

## 覚え書き

### 有坂 広一

#### 思いこみ

中学生の時、正岡子規が好きになった。どうして好きになったのか、うまく説明できないけれど、とにかく魅力があった。しかし子規や妹の律の件で長い間、勘違いしていたことがある。たとえば、兄の病気の世話をしていた律は生涯未婚だと思っていた。ところが、困難な合間に二度結婚しているのである。十五歳の時、陸軍軍人・恒吉忠道氏と結婚するが九カ月で離婚、十七歳の時、松山中学の教師・中森堀五郎氏と再婚するが十カ月で離婚。夏目漱石の『坊ちゃん』の「うらなり」のモデルと言われた人。

ところで、子規はどうなんだろう。女っ気は全く感じさせないし、むしろ結婚していない。私は病床で寝たつきりの姿が焼き付いているせいか、セックスは未経験だろうと勝手に思いこんでいた。しかし評論家の小谷野敦の『本当に偉いのか・あまのじゃく偉人伝』によると、「正岡子規は童貞ではなかっただろうし、遊郭などにも行ったろうし・・・」と推測している。私

は小谷野氏の認識に目を開かれる思いがした。子規は二十代の頃は健康であったし、また好奇心も人一倍強い人だった。女に関心を抱いても不思議はない。

さて、正岡子規の介護という献身的行為をした律は、兄の死後、どんな人生を歩んだか。彼女は三十四歳で共立女子職業学校に入学して教師の資格を取り卒業後は母校の事務員になり、さらに裁縫の教師になった。また俳人でもあった。明治の女としては力強い生き方を全うしたと言えるだろう。

#### 嘔吐

小学校一、二年生の頃、親戚の家で餅を焼いて食べた。子供達だけで大人は一人もいない。その際、私は餅が喉につかえて、瀕死の思いを味わった。こんな怖い思いをしたことはなかった。慌てて玄関に駆け出してしゃがんで思いつきり吐いた。おかげで異物はポロリと取れて土間に落ちた。ああ、助かった・・・命拾いしたものだ。後になってもその時の経験は尾を引いており、子供には親の監視下なしに絶対に食べさせないようにしている。

歯科医院も苦手である。入れ歯や差し歯を作る時だ。医師が席を外しているとき、看護師にその話をする、「そうね、私もオエーとする方だわ」

と同感した。そのオエーという言葉が面白く響いた。普段も聞かなくもない。特に若い人が口にするようだ。念のためにパソコンで検索してみると、福井県の方言と出ているし、その他にも別の土地でも言うらしい。要するに吐気の時の擬音語というわけだ。

そういえば、サルトルの『嘔吐』に印象的な言葉がある。作者はエピグラフに次のようなことを書いている。「彼は集団の中では取るに足りない人間だ。せいぜい一個人というところだ」つまり、その存在は無意味に近いということだろうか。そうだとしたら私には看過できない。自分は人から見たら嘔吐を感じさせる人間ということだから。いくら何でもオエーなんて言われたくない。

### 最後の革命幻想

一九七五年頃だったか、会社の先輩から革命の話を聞いた。私は信じていなかったが、誠実なSさんなら傾聴に値するだろうと耳を傾けた。彼は丁寧な口調でこう切り出した。

「有坂さんねえ、二十年後には、日本にも革命が起きますよ」

果たしてそうだったのか。実際はソ連が崩壊し、東西ドイツの壁は撤去された。革命とは正反対の現象が生じたわけだ。

私は大真面目なSさんの論を笑うつもりはない。こんなものだろう。誰かの歌の文句ではないけれど、時は流れる、これが運命だと思う。私は革命こそ信じていないが、長きに渡って革新政党を支持している。中三の時、上級生から貴重な本を戴いた。上級生の母から親交のあった母に、「息子からですが、お子さんに差し上げてください」と。

綺麗な包装紙に包んだ文庫本が二冊入っていた。毛沢東の『矛盾論』と『レーニン論文集』である。年少の私には読めそうにないので後年読むことにした。しかし、なかなか読む気になれず、年月を経るばかり。ところが、読む機会がおとずれたのだ。パソコンを見ていたら、橋下徹と石原慎太郎の両人が『矛盾論』が面白いと書いているので俄然読書欲が湧いてきて、心をゆすぶられた。「目の前の矛盾を解決しようと思ったら、背景にある大きな矛盾に気が付く……」などと書

いてある。どういう意味だろう。分かるような分からないような。それでいい。そのうち明確に理解するようになるだろう。思えば、革新政党との付き合いは長きに渡っている。時々顔を出す党員の支部長さんが、「有坂さん、いつまでも元気でいてください」

と声をかけてくれるのが嬉しい。年を重ねると、組織や集団と無縁になりがちだが、革新政党とは牢固と繋がっている。支部長さんにも、『矛盾論』の話をしてるので、

『矛盾論』は読みましたか」と聞かれた。

「ええ、どうにか・しかし革命はあってもいいです  
がね」

「まあね、革命も楽しからずやです」と支部長は笑い  
声。

### バス停の異変

住まいは江戸川区の葛西である。東京の外れであり、また千葉県のすぐ隣でもある。私は長年住んでいるが、同地で美人を見かけたことはほとんどない。ところで、いつものバス停で意外にも凄い美人と遭遇したのだ。

この土地の人ではないだろう。おそらく他所からきて、親戚の伯母さんとか、友人の家に一晚泊まって朝

帰るところだろう。都心でも滅多に見かけない美貌である。私はこの女性の容姿をどういう言葉で表現すべきか知る術もない。その時である。車道で毎日見かける初老とも中年ともつかぬ男性が目に見かけた。彼は毎日地面を見つめて黙々と自転車をこいで行くのだった。その男を見るたびに一体何が楽しくて人生を生きているんだらうとつい侮蔑の思いが湧いてくるのである。けれども、その日は違っていた。私は異様な変化に気がついたのだ。どうやら奴さんも美貌に見とれているようだ。首を前後左右に振り、あたかも驚天動地の出来事に出くわしたかのような振舞をしている。よほどの衝撃だったのだろう。私は自ずと注目した。やがて彼は通り過ぎてバスが来た。一場の寸劇は幕を閉じた。私は彼の動作に圧倒され、軽侮の目で見ていたのを恥じた。美人に高揚して何が悪いかだ、いいじゃん……。